

オリンピックの招致とレガシー

嵯峨 寿（筑波大学）

1. レジャー・レクリエーションの革新とオリンピック招致

レジャー・レクリエーションの充実にオリンピックをどう活かすことができるか。

国民のレジャー、レクリエーションのさらなる充実が学会員の目標であり、それへの献身はわれわれの学会の重要な役割のひとつでもある。現在、東京都は 2016 年夏季オリンピック競技大会の招致活動を推進しているが、それを契機に東京および日本のレジャー、レクリエーションの改善を図ることができないだろうか。そのアイデアをオリンピックの開催計画に盛り込むことで、オリンピックへの国民の関心、期待を高めると同時に、開催都市の選定にあたる IOC 国際オリンピック委員会に対するアピールポイントのひとつにすることはできないものか。

「レジャー・レクリエーションの充実」と「オリンピック招致に対する本学会の協力」このふたつのテーマをつなぐ接点を「オリンピック・レガシー」に求めてみてはどうか。

2. オリンピック・レガシー

東京都は 2008 年 1 月に IOC に対し、大会基本計画の概要を記した「申請ファイル」を提出する。現在 7 つある「申請都市 applicant city」がふるいにかけて 3～4 都市が「候補都市 candidate city」に選出される。そうすると東京都はより綿密な計画を記載した「立候補ファイル bid file」を提出することになる。これら 2 つのファイルいずれにも明記すべき内容のひとつがレガシー“legacy”（遺産）である。全 7 章構成の申請ファイルにおいてレガシーは、計画全体の土台・要に当たる第 1 章に位置し、同じく第 1 章を構成する motivation、concept と共にオリンピックのいわゆる「開催理念」に相当する極めて重要な要素である。

オリンピックにおけるレガシーの定義は必ずしも明確とはいえないが、IOC の説明や問いを吟味してみると、①持続可能な恩恵 benefits、②開催都市と開催国にとっての恩恵、③スポーツにとっての恩恵、④招致活動の成否に関わらず期待される恩恵、といったいくつかの条件が浮かび上がってくる。

では、東京都はどのようなレガシーを構想しているか。2007 年 11 月末に発表された「2016 年東京オリンピック・パラリンピック開催基本計画」の段階ではまだ抽象的な内容と表現にとどまっているが、今後はオリンピックに対する国民の理解、関心を喚起する上でも魅力的かつ具体的なレガシーが求められるに違いない。

3. レガシーの考案にあたって

オリンピック・レガシーを考案するにあたってまずは先の IOC の要件のほかに、「レジャー・レクリエーションの充実への寄与」を条件にすえたわけだが、その際にまずは、どのようなレジャー・レクリエーションが理想的であるのか、またレジャー・レクリエーションをめぐる解決が望まれる問題としてどのようなものが存在するかを検討・整理する作業が要るだろう。それに加え、次の点についても勸案が望まれる。

(1) 過去 3 大会のレガシーをどう活かすか

64 年東京、72 年札幌、98 年長野と日本はオリンピック開催回数の多い世界有数の国のひとつである。ベテラン国としての優勢を印象づけるにあたって過去のレガシーも十分に訴求点のひとつになり得る。各大会が遺し、今なお大切にされているレガシーの価値を再評価すると共に、そのよさをさらに発展させた新たなレガシーを構想できないものか。

(2) 世界の人々と共有できるもの

百年にわたる近代オリンピックは、2008年北京大会を含め、主として開催国の経済的発展の基礎となるインフラの整備を支援・推進する役割を果たしてきた。主に開催都市と開催国の人々がレガシーによる恩恵を享受するというのは1964年東京大会の場合も同様であったが、2016年大会においては、世界の人々と恩恵を分かち合える、国際貢献にもつながるレガシーを構想する自負と姿勢が問われよう。

(3) オリンピズムの根本原則

オリンピック競技大会はオリンピック・ムーブメントの一環であり、その頂点に位置している。オリンピック・ムーブメントの指導原理に当たるのがオリンピズム Olympism である。したがって、オリンピズムの具体的かつ重要な表現形態のひとつが競技大会という関係になるわけだが、オリンピックが他の国際競技イベントと決定的に異なる点はこのオリンピズムという理想にあるといっても過言ではない。

2012年夏季大会の招致でロンドンに敗れはしたものの、開催計画が最も高く評価されたパリは、「真のオリンピック市民“Olympic citizens”」をレガシーのひとつに訴えた。クーベルタンの母国としての誇りにかけても、オリンピズムの本質を正しく理解し、オリンピック・ムーブメントに積極的に参加する「オリンピック精神“Olympic spirit”」を備えた人々がオリンピック市民である。オリンピズムの根本原則は『オリンピック憲章』の中で次のように謳われている。

オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピズムが求めるのは、努力のうちに見いだされる喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。(根本原則1)

われわれはオリンピズム思想の中に、はたして

レジャー・レクリエーションの新たな可能性を見いだすことができるだろうか。

(4) シルバー世代のオリンピック参加

オリンピック・ムーブメントがそれへの主な参加対象に据えているのは青少年である。かれらの教育と国際交流を通して世界平和に寄与することがクーベルタンにとっての理想であった。子どもたちのスポーツ離れを懸念するIOCは2010年から、ユース・オリンピックの開催を決めたが、一方の中老年世代にとってオリンピックは4年に一度、テレビで観戦するだけのものでよいのか。世界でいち早く高齢社会となる日本では、オリンピック開催を機に、新たな世代がオリンピック・ムーブメントに積極的に参加するきっかけともなるようなレガシーを実現できないものか。それは従来のオリンピズムに大きな革新をもたらす可能性を秘めている。

4. レガシーの提案に向けて

東京都は2008年1月に申請ファイルを提出する。候補都市が発表されるのは同年6月であり、それ以降は国際招致レースが展開されると共に、2009年2月提出期限の立候補ファイルの作成作業も本格化する。立候補ファイルは当然ながら申請ファイルに基づいて作成されるが、より詳細かつ具体的な計画が必要であり、特にレガシーはオリンピック開催都市・国のメリットである以上、都民・国民からみて魅力的でなくてはならない。そうしたレガシーを東京都に対して提案できるタイミングは2008年6月～10月の期間に限られよう。

学会としてこのたび初の試みとなる本セッションを通じて、レジャー・レクリエーションの充実にオリンピックを活かす展望が「レガシー」という鍵によって開かれ、国民やIOCに対する有効なアピールにもなるようであれば、学会活性化のひとつの手がかりにもなりうる。ユニークなアイデアが出されるよう、活発な意見交換を期待したい。